

## 『維摩經玄疏』 訳注 (5)

菅野博史

本訳注は、『維摩經玄疏』訳注(一)、『大倉山論集』40, 1996.12, 235-261), 『維摩經玄疏』訳注(二)、『大倉山論集』45, 1999.3, 297-316), 『維摩經玄疏』訳注(三)、『多田孝文名誉教授古稀記念論文集 東洋の慈悲と智慧』所収, 33-54, 山喜房仏書林, 2013.3), 『維摩經玄疏』訳注(4)、『創価大学人文論集』29, 2017.3, pp. 33-72)の続編である。創価大学大学院の授業で、院生と『維摩經玄疏』を一緒に読んでいる。参加者は、横溝靖彦、大津健一、野原耕平、石田幸司の四氏である。

今回翻訳した『維摩經玄疏』の科文を下に示す。これまでの範囲の科文は、『維摩經玄疏』訳注(4)を参照。科文において、「項」の下の層については、算用数字を用いる。科文の名称については、テキストの箇所によって若干の異同が見られるので、適宜処理する。科文の名称の後の( )に、大正蔵巻第38の頁・段・行を挿入する。

翻訳部分に、大正蔵巻第38の頁・段を挿入する。

注のなかの引用典拠については、CBETAを利用する。『大日本統蔵經』については、『新纂大日本統蔵經』を使用し、略号をXとする。

『維摩經玄疏』 科文

『維摩經玄疏』 卷第三

- 3. 四教分別を明かす (532b5)
- 3.1 四教の名を釈す (532b16)
- 3.2 所詮を辨ず (534a20)
- 3.21 四諦の理に約して所詮を明かす (534b2)
- 3.211 所詮の四諦の理を明かす (534b3)
- 3.212 能詮の教を明かす (534b6)
- 3.213 經論に対するを明かす (534b9)
- 3.2131 經に対す (534b10)
- 3.2132 論に対す (534b16)
- 3.22 三諦の理に約して四教の所詮の理を明かす (534c17)
- 3.221 三諦の所詮の理を明かす (534c19)
- 3.222 能詮の四教を明かす (534c27)
- 3.223 經論に対するを明かす (535a5)
- 3.23 二諦の理に約して所詮を明かす (535a16)
- 3.231 正しく所詮の理を明かす (535a17)
- 3.232 能詮の四教を明かす (535a28)
- 3.233 經論に対す (535b2)
- 3.24 一諦の理に約して所詮の理を明かす (535b12)
- 3.241 正しく所詮の理を明かす (535b13)
- 3.242 能詮の四教を明かす (535b24)
- 3.243 經論に対す (535b28)

[翻訳]

### 3. 四教分別を明かす

第三に四教分別を明かすとは、前に三觀もて淨無垢稱を積するを明かす。理智無惑に約するに、智は能く理に稱い縁に稱うが故に、淨無垢稱の号を受く。但だ衆生の機縁は同じからざるを以て、頓・漸の異なり、不定・秘密<sup>1</sup>の殊なり有るを致す。是こを以て古今の諸師は各おの理積を為す。今、立つる所の義は、意として前の規に異なる。故に無言の理をば、悉檀もて縁に赴いて巧みに説く。略して四教を撰して、以て其の宗を暢べ、用て毘摩羅詰の名を通ず。若し能く斯の旨に達せば、但だ此の經の文義皎然たるのみに非ず、漸・頓・不定・秘密の蹤に皆な滞り無きなり。

今、此の義を明かすに、略して七重を開く。第一に四教の名を積し、第二に所詮を辨じ、第三に位に約して分別し、第四に権実を明かし、第五に觀心に対し、第六に諸の經論を通じ、第七に此の經の文を銷す。

#### 3.1 四教の名を積す

第一に四教の名を積すとは、即ち四意と為す。一に三藏教の名を積し、二に通教の名を積し、三に別教の名を積し、四に円教の名を積す。

第一に三藏教の名を積すとは、此の教は因縁生滅の四聖諦の理を明かす。正しく小乗を教え、傍ら菩薩を化す。言う所の三藏とは、一に修多羅藏、二に毘尼藏、三に阿毘曇藏なり。

一に修多羅藏とは、修多羅は、此には或いは無翻と言ひ、或いは有翻と言う。有翻と言う<sup>2</sup>とは、亦た多家の不同有れども、多く法本を用て翻と為す。謂う所は、出世の言教の本なり。故に法本と云う。即ち是れ四つの『阿含經』<sup>3</sup>なり。

二に毘尼藏とは、此に翻じて滅と言う。仏は作・無作戒を説いて、身口の

1 密 底本の「蜜」を宋本によって改める。以下同じ。

2 言有翻 宋本によって「言有翻」の三字を補う。

3 四つの『阿含經』 『長阿含經』 『中阿含經』 『增一阿含經』 『雜阿含經』 のこと。

悪を滅す。是の故に滅と云う。即ち是れ八十誦律<sup>4</sup>なり〔因は果に従って名を得るなり〕。

三に阿毘曇藏とは、阿毘曇、此には翻じて無比法と言う。聖人は智慧もて法義・戒・定を分別すること無比なるが故に、無比法と云う。若しは仏は自ら法相の義を分別し、若しは弟子は法相を分別するは、皆な阿毘曇と名づくるなり。

此の三法をば通じて藏と名づくるは、藏は含藏を以て義と為す。但だ解者は同じからず。有るが言わく、「文は能く理<sup>532c</sup>を含むが故に、名づけて藏と為す」と。有るが言わく、「理は能く文を含むが故に、名づけて藏と為す」と。今言わく、三法の名は各おの是れ一句なり。三名は各おの文理を含むが故に、藏と名づくるなり。阿含は即ち是れ定藏なるが故に、次第に求むと云うなり。毘尼は即ち是れ戒藏なるが故に、因縁もて求むと云うなり。阿毘曇は即ち是れ慧藏なるが故に、性相もて求むと云うなり<sup>5</sup>。此の教は<sup>まさ</sup>的しく小乗に属す。故に『法華』に云わく、「小乗の三藏に貪著する学者」<sup>6</sup>と。

第二に通教の名を釈す。通とは、同なり。三乗は同じく稟くるが故に、名づけて通と為す。此の教は因縁即空、無生の四真諦の理を明かす。是れ摩訶衍教の初門なり。正しく菩薩の爲めにして、傍ら二乗を兼ね。故に『大品經』

4 八十誦律 優波離が誦出した根本律のことで、現存しない。後に、これに基づいて、四分律、五分律などが分立したといわれる。『高僧伝』卷第十一、「因命持律尊者優波離比丘使出律藏。波離乃手執象牙之扇，口誦調御之言，滿八十反，其文乃訖。於是題之樹葉，号曰八十誦律。是後迦葉，阿難，末田地，舍那波斯，優波掘多，此五羅漢次第住持」(T50, no. 2059, p. 403, a5-10)を参照。

5 阿含は即ち是れ定藏なるが故に、次第に求むと云うなり。毘尼は即ち是れ戒藏なるが故に、因縁もて求むと云うなり。阿毘曇は即ち是れ慧藏なるが故に、性相もて求むと云うなり『阿毘曇毘婆沙論』卷第一、「復次修多羅中応次第求。以何等故。世尊説此。次復説此〔如説信仏，次応信法，是次第求義〕毘尼中應因縁求。如説此戒縁何事制。阿毘曇中應以相求，不以次第」(T28, no. 1546, p. 2, a13-16)を参照。

6 『法華』に云わく、「小乗の三藏に貪著する学者」『法華經』卷第五、安樂行品、「亦不親近 増上慢人 貪著小乘 三藏学者 破戒比丘 名字羅漢 及比丘尼 好戲笑者 深著五欲 求現滅度 諸優婆夷 皆勿親近」(T09, no. 262, p. 37, b23-27)を参照。

勸学品に明かさく、「三乗を学ばんと欲せば、悉く当に般若を学ぶべしと教う」<sup>7</sup>と。言う所の通とは、乃ち多塗有り。略して八義を出だす。一に教通、二に理通、三に智通、四に断通、五に行通、六に位通、七に因通、八に果通なり。教通とは、三乗は同じく幻化即空の教を稟くるなり。理通とは、同じく是れ偏<sup>8</sup>真の理なり。智通とは、同じく巧度の一切智を得るなり。断通とは、界内の惑断ずること同じきなり。行通とは、見思無漏の行は同じきなり。位通とは、乾慧地従り乃ち辟支仏地に至るまで、位は皆な同じきなり。因通とは、九無闕は同じきなり。果通とは、九解脱、二種の涅槃<sup>9</sup>の果は同じきなり。通の義に八有れども、但だ通教と名づくるは、若し通教に因らざれば、則ち理通を知り、乃至、通果を成ぜざるなり。故に諸の大乗方等、及び諸の般若に二乗の得道有るは、皆な同じく此の教を稟くればなり。

第三に別教の名を釈すとは、別とは、不共の名なり。此の教は二乗の人に共じて説かず、但だ菩薩を教うるのみなるが故に、別教と名づく。此の教は正しく因縁仮名、無量の四聖諦の理を明かす。的しく菩薩を化し、二乗に涉らず。言う所の別とは、義は乃ち多塗なれども、略して八意を出だす。一に教別、二に理別、三に智別、四に断別、五に行別、六に位別、七に因別、八に果別なり。故に別教と名づく。教別とは、恒沙の仏法を説くは、但だ菩薩の為めなるのみ。理別とは、蔵識に恒沙の俗諦の理有るなり。智別とは、道種智なり。断別とは、恒沙の無知、界外の見思、無明は断ずるなり。行別とは、菩薩は歴劫に自行・化他の行を修するなり。<sup>533a</sup>三十心<sup>10</sup>に無明を伏

7 『大品經』勸学品に明かさく、「三乗を学ばんと欲せば、悉く当に般若を学ぶべしと教う」『大品般若經』卷第三、勸学品、「善男子、善女人、欲学声聞地、亦当应聞般若波羅蜜、持誦誑正憶念如説行。欲学辟支仏地、亦当应聞般若波羅蜜、持誦誑正憶念如説行。欲学菩薩地、亦当应聞般若波羅蜜、持誦誑正憶念如説行。何以故。是般若波羅蜜中、広説三乗、是中菩薩摩訶薩、声聞、辟支仏当学」(T08, no. 223, p. 234, a15-21)を参照。

8 偏 底本の「遍」を宋本によって改める。

9 二種の涅槃 有余涅槃と無余涅槃のこと。『四教義』卷第一、「果通者、九解脱有余無余二種涅槃之果同也」(T46, no. 1929, p. 722, a11-12)を参照。

10 三十心 十住・十行・十廻向を指す。

するは是れ賢位，十地に真を発し無明を断ずるは是れ聖位なり。因別とは，無閼の金剛因なり。果別とは，解脱・大涅槃の四徳<sup>11</sup>の果なり。別の義に八有れども，但だ別教と名づくるは，若し別教に因らざれば，則ち別理を知り，乃至，別果を得ざるなり。

問うて曰う。何が故に説いて不共教と為さず，別教の名を作すや。

答えて曰う。『大智論』に不<sup>12</sup>共般若を明かすは，即ち是れ二乗の人に共に説かず<sup>13</sup>。『不思議経』<sup>14</sup>の如し。今，別教を明かすは，方等，『大品』を説くに，二乗は共に説を聞けども，別して菩薩を教うるが如し。兼ねて円教を簡非せんと欲す。別は通に異なると雖も，猶お未だ円ならざるなり。

第四に円教を釈すとは，円は不偏を以て義と為す。此の教は不思議因縁，中道実相の理を明かす。事理は具足して，偏ならず別ならず。但だ最上の利根の大士を化するが故に，円教と名づくるなり。言う所の円教とは，義は乃ち多塗なれども，略して説くに八有り。一に教円，二に理円，三に智円，四に断円，五に行円，六に位円，七に因円，八に果円なり。教円とは，直ちに一実諦を説く言教は不偏なり。理円とは，一実は即ち法界海の理にして不偏なり。智円とは，一切種智なり。断円とは，五住<sup>15</sup>は円かに断ずるなり。行

11 大涅槃の四徳 大涅槃の備える常・楽・我・浄の四種の徳のこと。

12 不 底本の「大」を版本によって改める。

13 『大智論』に不共般若を明かすは，即ち是れ二乗の人に共に説かず 『大智度論』卷第三十四，「般若波羅蜜有二種。一者と声聞，菩薩，諸天共説。二者但与十住具足菩薩説」(T25, no. 1509, p. 310, c13-14)，同，卷七十二，「有人言，般若有二種。一者唯与大菩薩説。二者三乘共説」(同前，p. 564, a21-22)，同，卷第百，「復次如先説，般若有二種。一者共声聞説。二者但為十方住十地大菩薩説，非九住所聞。何況新發意者」(同前，no. 1708, p. 754, b22-25)を参照。

14 『不思議経』『華嚴経』を指す。『法華玄義釈籤』卷第九，「若大論中指華嚴経名不思議経，当知並是随翻譯者取名各別，其義不殊」(T33, no. 1717, p. 880, c29-p. 881, a1)，『仁王経疏』卷第六，「智度論云，心行处滅，言語道断。大般若云，心言路絶，名不思議経」(同前，no. 1708, 413, b29-c2)を参照。

15 五住 『勝鬘経』一乗章，「煩惱有二種。何等為二。謂住地煩惱，及起煩惱。住地有四種。何等為四。謂見一处住地，欲愛住地，色愛住地，有愛住地。此四種住地，生一切起煩惱。起者，刹那心刹那相應。世尊，心不相應無始無明住地」(T12, no.

円とは、一行は一切行なり。位円とは、初めの一地従り諸地の功德を具足するなり。因円とは、双べて二諦を照らし、自然に流入するなり。果円とは、妙覚、不思議三徳の果は不縦不横なり。円の義に八有れども、但だ円教と名づくるは、若し円教に因らざれば、則ち円理を知り、乃至、円果を成ずることを得ざるなり。

問うて曰う。四教は何れの経論に出ずるや。

答えて曰う。四教は諸の経論に散在す。処として明かさざる無きなり。上に『法華経』に明かす所の「小乗の三蔵に貪著する学者」を引くが如し<sup>16</sup>。『成実論』に云わく、「故に我れは正しく三蔵の中の実義を論ぜんと欲す」<sup>17</sup>と。豈に三蔵教に非ざらんや。『大品経』勸学品は、三乗に同じく般若を学ぶを勧む<sup>18</sup>。『中論』に云わく、「諸法実相を得るに、三種の人有り」<sup>19</sup>と。豈に通教に非ざらんや。『無量義経』に云わく、「摩訶般若、華嚴海空は、菩薩の歴劫修行を宣説す」<sup>20</sup>と。『大智論』に云わく、「般若に二種有り。一には二乗に共じて説く。二に二乗に共じて説かず」<sup>21</sup>と。此くの如き等の経論は、豈に別教

353, p. 220, a2-6) を参照。

16 上に『法華経』に明かす所の「小乗の三蔵に貪著する学者」を引くが如し 前注 6 を参照。

17 『成実論』に云わく、「故に我れは正しく三蔵の中の実義を論ぜんと欲す」 成実論 卷第一、「故我欲正論 三蔵中実義」(T32, no. 1646, p. 239, b2) を参照。

18 『大品経』勸学品は、三乗に同じく般若を学ぶを勧む 前注 7 を参照。

19 『中論』に云わく、「諸法実相を得るに、三種の人有り」『中論』卷第三、観法品、「仏説実相有三種。若得諸法実相、滅諸煩惱、名為声聞法。若生大悲発無上心、名為大乘。若仏不出世、無有仏法時、辟支仏因遠離生智」(T30, no. 1564, p. 25, b23-26) を参照。

20 『無量義経』に云わく、「摩訶般若、華嚴海空は、菩薩の歴劫修行を宣説す」『無量義経』説法品、「次説方等十二部経、摩訶般若、華嚴海雲、演(「雲演」は【宋】【元】【明】【宮】には「空宣」に作る)説菩薩歴劫修行、而百千比丘、万億人天無量得須陀洹、得斯陀含、得阿那含、得阿羅漢、住辟支仏因縁法中」(T09, no. 276, p. 386, b24-28) を参照。

21 『大智論』に云わく、「般若に二種有り。一には二乗に共じて説く。二に二乗に共じて説かず」 前注 13 を参照。

に非ざらんや。『華嚴經』は「<sup>533b</sup>円満修多羅」を明かす<sup>22</sup>。此の經は、「一念に一切法を知るは、即ち是れ道場に坐す」と明かす<sup>23</sup>。『大品經』具足品に云わく、「一心に万行を具す」<sup>24</sup>と。『法華經』に云わく、「合掌し敬心を以て、具足の道を聞かんと欲す」<sup>25</sup>と。『涅槃經』に云わく、「是の大涅槃を、諸仏の法界と名づく」<sup>26</sup>と。『大智論』に云わく、「三智は其の実は一心に得」<sup>27</sup>と。此の如き等の諸經論は、豈に並びに円教を明かすに非ざらんや。是の義は下に在りて、自ら當に分明なるべし。

問うて曰う。四教の文は乃ち當に經論に散在すべけれども、未だ一處の經論に聚めて明かすを見ず。

22 『華嚴經』は「円満修多羅」を明かす 『摩訶止観』卷第一上、「華嚴曰、娑伽羅龍車軸雨海余地不堪。為上根性説円満修多羅。二乘如聾如瘖」(T46, no. 1911, p. 2, c18-19), 『四教義』卷第一、「華嚴經云、為説円満修多羅」(同前, no. 1929, p. 723, c7)を参照。

23 此の經は「一念に一切法を知るは、即ち是れ道場に坐す」を明かす 『維摩經』卷第上、菩薩品、「一念知一切法是道場。成就一切智故」(T14, no. 475, p. 543, a4-5)を参照。

24 『大品經』具足品に云わく、「一心に万行を具す」 『大品般若經』卷第二十五には具足品がある (T08, no. 223, p. 404, b2)。また、『大品般若經』卷第二十三、一念品、「須菩提白仏言、世尊、云何菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時、一念中具足六波羅蜜、四禪、四無量心、四無色定、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脫門、仏十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、三十二相、八十隨形好」(同前, p. 386, c26-p. 387, a2)を参照。『大智度論』には、「一心具万行品」という表現が出る (T25, no. 1509, p. 670, b24)。

25 『法華經』に云わく、「合掌し敬心を以て、具足の道を聞かんと欲す」 『法華經』方便品、「諸天龍神等 其数如恒沙 求仏諸菩薩 大数有八万 又諸万億国 轉輪聖王至 合掌以敬心 欲聞具足道」(T09, no. 262, p. 6, c3-6)を参照。

26 『涅槃經』に云わく、「是の大涅槃を、諸仏の法界と名づく」 『涅槃經』卷第四、四相品、「大涅槃者、即是諸仏如来法界」(T12, no. 375, p. 629, b15)を参照。

27 『大智論』に云わく、「三智は其の実は一心に得」 『大智度論』卷第二十七、「問曰、一心中得一切智、一切種智、断一切煩惱習。今云何言以一切智具足得一切種智、以一切種智断煩惱習。答曰、実一切一時得。此中為令人信般若波羅蜜故、次第差品説。欲令衆生得清淨心。是故如是説。復次雖一心中得、亦有初、中、後次第。如一心有三相、生因縁住、住因縁滅」(T25, no. 1509, p. 260, b17-24)を参照。



答えて曰う。復た的<sup>まさ</sup>しき四教の名目無しと雖も、今、大乘の經論に映傍して四教の名義を立つるは、『大涅槃經』に、四不可説は因縁有るが故に、亦た説くことを得可しと明かすが如し<sup>28</sup>。四種の説もて、以て前縁を化するは、即ち是れ四教なり。『大涅槃經』に四番に四諦の法輪を転ずるを明かす<sup>29</sup>は、即ち是れ四教の意なり。『法華經』に「三草二木は一地に生ずる所なり」と明かす<sup>30</sup>は、即ち是れ四教の意なり。『中論』に諸の異執を破し既<sup>つ</sup>くす。「因縁所生」の四句を説いて、仏の四説に通ずるは、即ち是れ四教の意なり<sup>31</sup>。此の如き等の四種の説法は、機に随いて物を利するは、即ち是れ四教の義にして、皆な是れ四教の異名なるのみ。

問うて曰う。『法華經』に云わく、「仏は平等に説くこと、一味の雨の如し」<sup>32</sup>と。何ぞ曾て定んで四説の殊なり有らんや。

28 『大涅槃經』に、四不可説は因縁有るが故に、亦た説くことを得可しと明かすが如し 『南本涅槃經』 卷第十九、光明遍照高貴徳王菩薩品、「生生不可説。生生亦不可説。生不生亦不可説。不生不生亦不可説。生亦不可説。不生亦不可説。有因縁故亦可得説」(T12, no. 375, p. 733, c9-12) を参照。

29 『大涅槃經』に四番に四諦の法輪を転ずるを明かす 『法華玄義』 卷第二下にも、「四種四諦者、一生滅、二無生滅、三無量、四無作。其義出涅槃聖行品。約偏円事理分四種之殊」(T33, no. 1716, p. 700, c28-p. 701, a1) とあるように、天台宗では四種の四諦の典拠を『涅槃經』 聖行品としている。しかし、經文にそのまま出ているわけではない。『法華玄義釋籤』(以下、『釋籤』と略記する) 卷第五、「初文云其義出涅槃聖行品者、第十一第十二經広明聖諦。今多依彼。然聖行申明四諦義、兼含大小。若解生滅及以無量、其文則顯。無生無作文稍隱略。具如止觀第一記」(同前, no. 1717, p. 849, c27-p. 850, a2) を参照。

30 『法華經』に「三草二木は一地に生ずる所なり」と明かす 『法華經』 葉草喻品、「雖一地所生、一雨所潤、而諸草木各有差別」(T09, no. 262, p. 19, b5-6) を参照。

31 『中論』に諸の異執を破し既<sup>つ</sup>くす。「因縁所生」の四句を説いて、仏の四説に通ずるは、即ち是れ四教の意なり 『四教義』 卷第一には、「中論破諸異執既訖、復説因縁四句、通佛四説、即是四教之意」(T46, no. 1929, p. 723, c21-23) とあり、「訖復」は甲本には、「洗浄」に作る。『維摩經玄疏籤録』(以下、『籤録』と略記する)には、「既、尽也」と注している。

32 『法華經』に云わく、「仏平等に説くこと、一味の雨の如し」 『法華經』 葉草喻品、「仏平等説、如一味雨」(T09, no. 262, p. 20, b2-3) を参照。

答えて曰う。上来処処に四不可説を引く。因縁有るが故に、亦た説くことを得可し。尚おも未だ曾て定んで一説有らず。何ぞ曾て定んで四教有らんや。但だ衆生に四種の根性の不同有るを以てなり。謂う所は、下・中・上・上上の四根の不同なり。四説・四教の殊なりを感ずるを致すは、即ち是れ『法華経』に、「三草二木は一地の生ずる所なり」の譬えを明かして<sup>33</sup>、此の四根を譬うるなり。故に此の経に、「仏は一音を以て法を演説す。衆生は類に随いて各おの解を得」と云う<sup>34</sup>は、即ち是れ四根異なりて、仏の教えを解すこと同じからざるなり。但だ諸経に義を明かすこと同じからず。自ら異説異解、異説一解<sup>35</sup>、一説異解、一説一解、無説無解有り。故に此の経に云わく、「其れ法を説く者に説無く示無し。其れ法を聴く者に聞無く得無し」<sup>36</sup>と。若し此の意に達せば、四教もて点定<sup>37</sup>して義を立つること、何ぞ疑う所あらんや。

問うて曰う。四教の義は地論人の四宗<sup>38</sup>の義と同じきや。

答えて曰う。若し人問うて「四諦は四大と同じきや」と言わば、此れは云何んが答えん。今、四宗に依りて四教を立てざるは、意乃ち多塗なり。略し

33 『法華経』に、「三草二木は一地の生ずる所なり」の譬えを明かして 前注 30 を参照。

34 此の経に、「仏は一音を以て法を演説す。衆生は類に随いて各おの解を得」と云う『維摩経』巻上、仏国品、「仏以一音演説法 衆生随類各得解 皆謂世尊同其語 斯則神力不共法」(T14, no. 475, p. 538, a2-4) を参照。

35 異説一解 底本の「一解」を改める。『再校維摩経玄義』の頭注に「異説異解下、宋有異説二字」とある。

36 此の経に云わく、「其れ法を説く者に説無く示無し。其れ法を聴く者に聞無く得無し」『維摩経』巻上、弟子品、「夫説法者、無説無示。其聴法者、無聞無得。譬如幻士為幻人説法」(T14, no. 475, p. 540, a18-19) を参照。

37 点定 底本の「点空」を改める。『四教義』巻第一、「若達此意、四教点定立義」(T46, no. 1929, p. 724, a4) を参照。「点定」は、確定するの意。

38 「四宗」は、光統律師慧光(四六八一—五三七)の四宗判を指す。『法華玄義』巻第十上には、因縁宗(『阿毘曇』)、仮名宗(『成実論』)、誑相宗(『大品般若経』・三論)、常宗(『涅槃経』・『華嚴経』)を四宗判として紹介している。『法華玄義』巻第十上、「六者仏馱三蔵学士光統所辨四宗判教。一因縁宗、指毘曇六因四縁。二仮名宗、指成論三仮。三誑相宗指大品、三論。四常宗、指涅槃、華嚴等、常住仏性、本有湛然也」(T33, no. 1716, p. 801, b11-15) を参照。

て三妨を出だす。一に四宗の名義は、言方にして滞るに似たり。二に細かく尋ね研覈するに、名を立て義を作るは、便ならざるが似如し。三に四宗の名義は、言は富博なりと雖も、一家往望して仏の教門を撰するに、猶お闕くる所有り。

一に四宗の名義は、言方にして滞るに似たりとは、彼れは四不可説に依りて、四悉檀を用て説かざれば、則ち滞を成ずるなり<sup>39</sup>。二に細かく尋ね研覈するに、名義は便ならざるが似如しとは、彼の四宗の毘曇に見有得道<sup>40</sup>を明かすは、因縁を宗と為すことを許す可し。三仮は是れ世諦なり。世諦を見れども、未だ道を得ず。何ぞ仮名を以て宗と為すことを得ん。『成論』は見空得道を明かす。何ぞ空を以て宗とせざるや。且らく『大智論』は三蔵教に三門の得道有るを明かす。空は是れ第二門にして、仮名の門無きなり。又た、『大智論』は、方広人<sup>41</sup>は十論<sup>42</sup>を取りて、一切法は不生不滅なりと説き、般若の意を失うを弾ず。豈に幻化を不真宗と為すことを得んや。今、<sup>はか</sup>諮りて曰わく、不真宗は即ち是れ通教にして、真宗は即ち是れ通宗なりとは、宗は則ち真・不真に通ず。不真は何ぞ宗を没して教を用うることを得ん。真宗は何れの意もて

39 彼れは四不可説に依りて、四悉檀を用て説かざれば、則ち滞を成ずるなり 『四教義』巻第一、「彼不約四不可説用四悉檀趣縁而説，即成滞也」(T46, no. 1929, p. 724, b20-21)を参照。

40 見有得道 底本の「通」を『再校維摩經玄義』に「通宋作道」とあり、これに従う。「見有得道」は、有を見て道(覚り)を得ること。

41 方広人 『大智度論』巻第一、「更有仏法中方広道人言，一切法不生不滅，空無所有，譬如兔角龜毛常無。如是等一切論議師輩，自守其法，不受余法，此是實，余者妄語。若自受其法，自法供養，自法修行，他法不受，不供養，為作過失」(T25, no. 1509, p. 61, a28-b4)を参照。また、『三論玄義』、「二者学大乘者，名方広道人。執於邪空，不知仮有。故失世諦。既執邪空，迷於正空。亦喪真矣」(T45, no. 1852, p. 6, a18-21)を参照。

42 十論 『大品般若經』巻第一，序品(大正八・二一七上を参照)には、諸法を幻・焰・水中月・虚空・響・捷闍婆城・夢・影・鏡中像・化の十種にたとえている。『大品般若經』，巻第一，序品，「無数億劫説法巧出，解了諸法如幻，如焰，如水中月，如虚空，如響，如捷闍婆城，如夢，如影，如鏡中像，如化，得無闍無所畏」(T08, no. 223, p. 217, a20-23)を参照。

教無くして宗を立つるや。宗に若し教無くば、何ぞ真と知ることを得んや<sup>43</sup>。

答えて曰う。『楞伽經』に云わく、「説通は童蒙を教え、宗通は菩薩を教う」<sup>44</sup>と。故に真を以て通宗と為すなり。又た、語りて曰わく、若し爾らば、前の因縁・仮名・不真は皆な是れ童蒙を教うれば、応に宗の名を立つべからざるなり。是くの如く覆却並決す<sup>45</sup>。意に謂うに、四宗の名を立つるは、便ならざるが似如きなり。

今、四教と言うは、仏は初めて得道する従り大涅槃に至るまで、一切の法門を顕示するに、言教に非ざること無きなり。

三に四宗もて義を明かすは、若し古今に比せば、実に富博と為すも、一家往望して仏法の意を撰するに、猶お大いに闕くる所有り。今、諸経論を採りて、四教の義を立つ。一教に各おの四門有り。四教に合して十六門有り。即ち是れ十六宗もて義を明かすなり。彼の因縁・仮名の両宗は、此に明かす所の三蔵教の有・空の二門と相い參ずるに似たり。猶お毘勒門、及び非有非空門を闕くるなり<sup>46</sup>。彼の不真宗は幻化の如きを明かす。此の通教の有門と相い參ず

43 『法華玄義』卷第十上、「次難四宗者、謂因縁宗……彼云。誑相不真宗即是通教。常宗祇是真宗。即是通宗者、宗則通真不真。不真何意沒宗而用教。真宗何意無教而立宗。宗若無教、何得知真。真宗若沒宗有教、則同名通教。若俱沒教留宗、則同名通宗。若俱安教、則同名通宗教。若留不真真、則名通不真宗教・通真宗教。通不真宗可為三乘通脩。通真宗亦應三乘通脩也。若言此通是融通之通者、通教亦是通真之真也。此則兩名混同、義無別也。彼引楞伽經云、説通教童蒙、宗通教菩薩。故以真宗為通宗也。若爾、是則因縁・仮名・不真、皆是童蒙。不應悉立宗也。覆却並決。四宗名義、甚不便也」(T33, no. 1716, p. 804, b6-c15)を参照。

44 『楞伽經』に云わく、「説通は童蒙を教え、宗通は菩薩を教う」『楞伽阿跋多羅寶經』卷第三、一切仏語心品、「謂我二種通 宗通及言説 説者授童蒙 宗為修行者」(T16, 503a29-b1)を参照。なお、前注43を参照。

45 覆却並決す「覆却」は、くつがえしりぞけること。具体的には、四宗についてあれこれと検討することを意味するか。「並決」は、(四宗について)非難してきっぱりと決めること。なお、前注43を参照。

46 猶お毘勒門、及び非有非空門を闕くるなり 『四教義』卷第一に、「彼因縁仮名兩宗、似与此所明三蔵教有空二門相參、猶闕毘勒門及非有非空兩門也」(T46, no. 1929, p. 724, c16-18)とあるように、「与」がある方が読みやすい。「毘勒門」は、亦有亦空門に該当する。

るに似たり。余の三門は彼しこに明かさざる所なり。彼の真宗は此の別教の有門と相い參ずるに似たり。三門は彼しこに明かさざる所なり。是れ則ち四宗もて義を明かすに、但だ三教の四門<sup>47</sup>と相い參ずることを得るのみにして、円教の四門は彼しこに明かさざる所なり。四教に猶お十二門有りて<sup>48</sup>、彼の四宗に明かさざる所なり。

又た、護身法師<sup>534a</sup><sup>49</sup>は五宗を用て義を明かす。四宗は前の如し。長して法界宗を立つ。此の円教の有門と相い參ずるに似たり。四教に猶お十一門有りて<sup>50</sup>、彼しこに明かさざる所なり。

耆闍法師<sup>51</sup>は六宗を用て義を明かす。三宗は此の三門と相い參ずるに似たり。上に分別するが如し。彼の真宗は、此の通教の空門と相い參ず。彼の常宗は、此の別教の有門と相い參ずるに似たり。彼の円宗は、此の円教の有門と相い參ずるに似たり。此の四教に猶お十門有りて<sup>52</sup>、彼の六宗に明かさざる所なり。故に知る、四宗・五宗・六宗は古今已來、義を明かすこと富博なりと言うと雖も、今家往望して仏の教門を撰するに、猶お闕くる所有るなり。

47 三教の四門 藏教の有門・空門、通教の有門、別教の有門を指す。

48 四教に猶お十二門有りて 四教の十六門のうち、藏教の有門・空門、通教の有門、別教の有門を除いたもの。

49 護身法師 護身[寺]自軌大乘 護身寺自軌については未詳。『釈籤』卷第十九、「護身寺自軌法師大乘是人為立号、以重其所習、故美之称为大乘」(T33, no. 1717, p. 951, b7-9)、希迪『五教章集成記』卷第一、「五護身法師。義苑曰、護身寺名。師諱自軌。探玄曰、此於前第四宗内、開真仏性、以為真宗。即涅槃等經」(X58, no. 999, p. 405, c4-5)を参照。また、『法華玄義』卷第十上、「六者仏駄三藏学士光統所辨四宗判教。一因縁宗。指毘曇六因四縁。二仮名宗。指成論三仮。三誑相宗。指大品三論。四常宗。指涅槃華嚴等常住仏性本有湛然也。七者有師開五宗教。四義不異前。更指華嚴為法界宗。即護身自軌大乘所用也。八者有人称光統云、四宗有所不收。更開六宗。指法華万善同帰。諸仏法久後 要当説真實。名為真宗。大集染淨俱融。法界円普、名為円宗。余四宗如前。即是耆闍凜師所用」(T33, no. 1716, p. 801, b11-21)を参照。

50 四教に猶お十一門有りて 四教の十六門のうち、藏教の有門・空門、通教の有門、別教の有門、円教の有門を除いたもの。

51 耆闍法師 耆闍寺安凜(五〇七一五八三)のこと。前注49を参照。

52 此の四教に猶お十門有りて 四教の十六門のうち、藏教の有門・空門、通教の有門・空門、別教の有門、円教の有門を除いたもの。

四悉檀の義を明かす所以は、正しく是れ一家の教を通じ法を説くことは古今の法を説くことと、運用同じからざるを述べればなり。前に三觀を明かし、豎に諸法を破すこと、略して数十番と為す。次に、此の下に四教の所詮を明かし、諸教に約して義を立つ。其の尋ね覽る者は、則ち知る、諸禪師、及び三論師の破の義、及び立の義と、意同じからざるなり。

問うて曰う。四教は遍く衆經を通ず。何ぞ的しく用て此の經を通ずることを得んや。

答えて曰う。今、四教の義を撰して、遍く諸經を通ずるに、別に大本有り。略して其の要を撮る。此の經の文を通ずとは、正しく此の經は具さに四教もて道に入るを明かすと言う。故に須らく大意を知るべきなり。但だ諸師は多く經を採りて論を通じ、晩生をして皆な論は富み經は貧しと謂わしむるを致す。今は經の論を採りて經の意を通じ、後生をして經は富み論は貧しと知らしめんと欲するなり。大乘は真仏の説く所、功德無量にして、是れ入道の正因なりと敬重す。經を輕んじ論を重んずるは、甚だ傷む可きなり。

### 3.2 所詮を辨ず

第二に所詮を辨ずとは、夫れ教は是れ能詮、理は是れ所詮なり。故に理に因りて教を設け、教に由りて理を顯わす。理に即せば教に非ず、教に即せば理に非ず。理を離れて教無く、教を離れて理無し。故に『思益經』に云わく、「菩提の中に文字無く、文字の中に亦た菩提無し。菩提を離れて文字無く、文字を離れて菩提無し」<sup>53</sup>と。菩提を離れて文字無きを以ての故に、理に約して教を施す。文字を離れて菩提無きが故に、教を施して即ち能く理を顯わす。是れ則ち教を能詮と為し、理を所詮と為す意は此に在り。言う所の理とは、即ち是れ諦なり。今、諦に約して理を明かす。理に由りて教を起し、教は能く理を詮ず。教は是れ能詮、理は是れ所詮なり。

53 『思益經』に云わく、「菩提の中に文字無く、文字の中に亦た菩提無し。菩提を離れて文字無く、文字を離れて菩提無し」 守徳本純『維摩詰經四教玄義籤録』によれば、『思益梵天所問經』の取意である。

所詮の義に就いて、略して四意と為す。一に四諦の理に約して所詮を明かし、二に三諦の理に約して所詮<sup>534b</sup>を明かし、三に二諦の理に約<sup>54</sup>して所詮を明かし、四に一諦の理に約して所詮を明かす。

### 3.21 四諦の理に約して所詮を明かす

第一に四諦に約して所詮を明かすとは、即ち三意と為す。一に所詮の四諦の理を明かし、二に能詮の教を明かし、三に経論に約すを明かす。

#### 3.211 所詮の四諦の理を明かす

一に所詮の四諦の理を明かすとは、四種の四諦有り。一に生滅の四諦、二に無生の四諦、三に無量の四諦、四に無作の四諦なり。大意は『大涅槃經』に出ず。

#### 3.212 能詮の教を明かす

二に能詮の教を明かすとは、即ち是れ四教は能く四種の四諦の理を詮ずるなり。即ち四と為す。一に三蔵教は生滅の四諦の理を詮じ、二に通教は無生の四真諦の理を詮ずるを明かし、三に別教は無量の四諦の理を詮ずるを明かし、四に円教は無作の四諦の理を詮ずるを明かすなり。

#### 3.213 経論に対するを明かす

三に経論に対するを明かすとは、即ち二意と為す。一に経に対し、二に論に対す。

##### 3.2131 経に対す

一に経に対すとは、『華嚴經』の若きは、多く別・円の両教を明かし、無量・

---

54 約 底本の「明」を、『再校維摩玄義』の頭注「明二明宋作約」と『四教義』巻第二、「三約二諦之理以明所詮」(T46, no. 1929, p. 725, b24-25)によって、「約」に改める。

無作の二種の四諦の理を詮ず。声聞経は、但だ三蔵教を明かし、生滅の四諦の理を詮ずるのみ。『大集』の方等、及び此の経は、四教を明かし、四種の四諦の理を詮ず。『摩訶般若』は、多く三教を明かし、三種の四諦の理を詮ず。『法華経』は、但だ円教<sup>55</sup>を説き、無作の四諦の理を詮ずるのみ。『大涅槃』は四教を明かし、四種の四諦の理を詮ずるなり。

### 3.2132 論に対す

二に論に対するを明かすとは、若し別して経の論を通ぜば、経に類して知る可し。若し通じて経の論を申べば、『中論』に一切内外の顛倒執諍を破し竟わるが如し。

外人は問うて曰う。若し一切世間は皆な空・無所有ならば、即ち応に無生無滅なるべし。生滅無きを以ての故に、則ち四諦・四沙門果・三宝無し。若し空法を受けば、此の如き等の過有り<sup>56</sup>。

論主は答えて曰う。汝は今、実に空・空の因縁を知ること能わず<sup>57</sup>。諸仏は二諦に依り、衆生の為めに説法す。若し二諦を知らざれば、則ち真の仏法を

55 教 底本の「経」を、文意と『四教義』巻第二、「法華但用円教詮無作四実諦理」(T46, no. 1929, p. 727, a23-24) によって、「教」に改める。

56 外人は問うて曰う。若し一切世間は皆な空・無所有ならば、即ち応に無生無滅なるべし。生滅無きを以ての故に、則ち四諦・四沙門果・三宝無し。若し空法を受けば、此の如き等の過有り 『中論』巻第四、観四諦品、「若一切世間皆空無所有者、即ち無生無滅。以無生無滅故、則無四聖諦。何以故。從集諦生苦諦。集諦是因、苦諦是果。滅苦集諦、名為滅諦。能至滅諦、名為道諦。道諦是因、滅諦是果。如是四諦有因有果。若無生無滅、則無四諦。四諦無故、則無見苦斷集証滅修道。見苦斷集証滅修道無故、則無四沙門果。四沙門果無故、則無四向四得者。若無此八賢聖、則無僧宝。又四聖諦無故、法宝亦無。若無法宝僧宝者、云何有仏。得法名為仏。無法、何有仏。汝説諸法皆空、則壞三宝。復次空法壞因果、亦壞於罪福。亦復悉毀壞一切世俗法。若空法者、則破罪福及罪」(T30, no. 1564, p. 32 p. 32, b23-c8) を参照。

57 論主は答えて曰う。汝は今、実に空・空の因縁を知ること能わず 『中論』巻第四、観四諦品、「答曰。汝今実不能知空空因縁及知於空義。是故自生惱」(同前, p. 32, c9-12) を参照。



知らず<sup>58</sup>。空の義有るを以ての故に、則ち一切法成ずることを得。若し空の義無くば、一切法は則ち成ぜず<sup>59</sup>。一切法は成ぜば、四諦・四沙門果・三宝有るなり。

今、此の語を釈す。論主は執見を破すこと既に尽くせば、四諦・四沙門果・三宝有るを明かすとは、即ち是れ摩訶衍教の三種の四諦、三種の四沙門果、三種の三宝を申ぶるなり。

問うて曰う。云何んが知ることを得る。

答えて曰う。論主は偈を説くが故に有りと知るなり。偈に云わく、「因縁もて生ずる所の法は、我れ即ち是れ空なりと説く」<sup>60</sup>と。此の偈は通教の大乗、無生の四諦・四沙門果・三宝を詮ずるを申ぶるなり。偈に、「亦た名づけて仮名と為す」と云うは、即ち是れ別教の大乗、無量の四聖諦・四沙門果・三宝を詮ずるを申ぶるなり。偈に、「亦た中道の義と名づく」と云うは、即ち是れ円教の大乗、無作の四実諦・四沙門果・三宝を詮ずるなり。破申の意なり。大乘の三教は祇だ一偈を用うるのみ。論を作るの巧<sup>61</sup>妙は、此に在り。次に後に両品を説く。初品に云わく、「問うて曰う。已に摩訶衍は第一義に入ると知る。今、声聞の經を聞いて、第一義に入らんと欲す」<sup>62</sup>と。論主は具さに

58 諸仏は二諦に依り、衆生の為めに説法す。若し二諦を知らざれば、則ち真の仏法を知らず 『中論』 卷第四、觀四諦品、「諸仏依二諦、為衆生説法。一以世俗諦、二第一義諦。若人不能知分別於二諦、則於深佛法、不知真實義」(同前, p. 32, c16-19) を参照。

59 空の義有るを以ての故に、則ち一切法成ずることを得。若し空の義無くば、一切法は則ち成ぜず 『中論』 卷第四、觀四諦品、「復次以有空義故、一切法得成。若無空義者、一切則不成。以有空義故、一切世間出世間法皆悉成就。若無空義、則皆不成就」(同前, p. 33, a21-25) を参照。

60 偈に云わく、「因縁もて生ずる所の法は、我れ即ち是れ空なりと説く」 『中論』 卷第四、觀四諦品、「衆因縁生法 我說即是無 亦為是假名 亦是中道義」(同前, p. 33, b11-13) を参照。

61 巧 底本の「功」は、『四教義』 卷第二、「作論之巧妙在於斯」(T46, no. 1929, p. 727, b16) によって「巧」に改める。

62 初品に云わく、「問うて曰う。已に摩訶衍は第一義に入ると知る。今、声聞の經を聞いて、第一義に入らんと欲す 『中論』 卷第四、觀十二因縁品、「問曰。汝以摩訶

生滅の十二因縁を明かし、六十二見を破し、第一義に入る。即ち是れ鈍根の声聞の弟子の爲めに、因縁生滅の相を説く。生滅の因縁は、即ち是れ生滅の四諦・四沙門果・三宝なり。『中論』は前に摩訶衍の通・別・円の三教の三種の四諦・四沙門果・三宝を申ぶ。後の両品に三蔵の生滅の四諦・四沙門果・三宝を申ぶるは、後世の人の根は<sup>うた</sup>転た鈍なるを以て、<sup>ま</sup>應に須らく遷た此の教を用うべければなり。是れ則ち『中論』の文は略なれども、義は富めり。仏の四教を申ぶること既に明らかなれば、四諦の理を詮ずること已に顕わるるが故に、四諦有りと言うなり。乃ち是れ如意珠<sup>63</sup>の論にして、唵水珠の論<sup>64</sup>に非ざるなり。若し此の義を解せずば、単復もて仮を織り、未だ若<sup>いか</sup>爲んが經を通ずるか<sup>か</sup>を知らず。四仮<sup>65</sup>もて經を通ずること、意終に見難きなり。

### 3.22 三諦の理に約して四教の所詮の理を明かす

第二に三諦に約して四教の所詮の理を明かすとは、即ち三意と爲す。一に三諦の所詮の理を明かし、二に能詮の四教を明かし、三に經論に約す。

#### 3.221 三諦の所詮の理を明かす

一に三諦の所詮の理を明かすとは、三諦の名義は具さに『瓔珞』、『仁王』

衍説第一義道。我今欲聞説声聞法入第一義道」(T30, no. 1564, p. 36, b18-19)を参照。  
63 珠 底本の「殊」を、『再校維摩玄義』、『四教義』卷第二、「乃是如意珠論、非唾水精論也」(T46, no. 1929, p. 727, b26-27)によって、「珠」に改める。

64 唵水珠の論 「珠」については、前注 63 と同じ。『四教義』卷第二にも、「乃是如意珠論、非唾水精論也」(同前, p. 727, b26-27)とあるが、「唾水精論」は、甲本には「水精珠論」に作り、乙本には「唵水論」に作る。「唵」は、すするの意であるが、全体として意味不明。守篤本純『維摩詰經四教玄義籤録』には、「唵水、明本作水精珠三字。一本作唾水水精四字。唾、是唵之差也。宝地引遲記〔云々〕。未詳。今謂、此是古人調中論人之語。以下第三卷〔七号〕叙三論人破地人義云、汝是不見真空。亦是妄水義為証。今祖師顯論巧説破申之旨、故有此歎辭也」とある。

65 四仮 『摩訶止観』卷第五下、「仮者、虚妄顛倒、名之仮耳。例前亦応言単四仮・複四仮・具足四仮」(T46, no. 1911, p. 63, a4-5)、『大乘玄論』卷第五、「仮乃衆多。略明四種。一因縁、二隨縁、三就縁、四対縁」(T45, no. 1853, p. 71, c24-25)を参照。

の両經に出ず。『經』に云わく、「一に有諦、二に無諦、三に中道第一義諦なり」<sup>66</sup>と。有諦とは、世の人の心に見る所の理の如きを、名づけて有諦と為す。亦た俗諦と名づく。無諦とは、出世の人の心に見る所の理を、名づけて無諦と為す。亦た真諦と名づく。中道第一義諦とは、諸仏菩薩の見る所の理を、中道第一義諦と名づく。亦た一実諦と名づく。故に、『大涅槃經』に云わく、「凡夫とは有、二乗とは無、諸仏菩薩は不有不無なり」<sup>67</sup>と。三諦の義は、入不二法門品を釈するに至りて、当に略して明かすべきなり。

### 3.222 能詮の四教を明かす

二に能詮の四教を明かすとは、即ち四と為す。

一に三藏教は但だ二諦の理を詮ずるのみ。所以に稟教の流れは、仏性・常住涅槃を聞かず。

二に通教も亦た但だ二諦<sup>535a</sup>の理を詮ずるのみ。所以に稟教の流れも亦た仏性・常住涅槃を聞かず。三乗は猶お灰断<sup>68</sup>の果を存するなり。

三に別教は別して三諦の理を詮ず。所以に稟教の流れは、三十心に但だ二観・二智の方便を成じ、登地に方に乃ち仏性を見、法流に入るなり。

66 『經』に云わく、「一に有諦、二に無諦、三に中道第一義諦なり」『仁王般若波羅蜜經』卷第一、二諦品、「大王、若有若無者、即世諦也。以三諦撰一切法、空諦、色諦、心諦故、我說一切法不出三諦」(T08, no. 245, p. 829, b27-29)を参照。

67 『大涅槃經』に云わく、「凡夫とは有、二乗とは無、諸仏菩薩は不有不無なり」『南本涅槃經』卷第十二、聖行品、「如出世人之所知者、名第一義諦。世人知者、名為世諦」(T12, no. 375, p. 684, c17-18)を参照。また、『四教義』卷第二、「如涅槃經云、如世人心所見者、名為世諦。二無諦者、三乘出世之人所見真空、無名無相、故名為無。審実不虛、目之為諦、故言無諦。亦名真諦、亦名第一義諦。故涅槃經云、如出世人心所見、故名為第一義諦。三中道第一義諦者、遮二辺、故說名中道。言遮二辺者、遮凡夫愛見有辺、遮二乘所見無名無相空辺、遮俗諦・真諦之二辺、遮世諦・第一義諦之二辺、遮如此等之二辺、名為不二。不二之理、目之為中。此理虛通無擁(甲本には「壅」に作る)、名之為道。最上無過、故稱第一義。深有所以、目之為義。諸仏菩薩之所証見、審実不虛、謂之為諦、故言中道第一義諦」(T46, no. 1929, p. 727, c7-19)を参照。

68 灰断 灰身滅智と同義。無余涅槃に入って、身も心も智もまったく無に帰すこと。

四に円教は円かに三諦を詮ず。稟教の流れは、初心に即ち仏知見を開き、自然に薩婆若海に流入するなり。

### 3.223 経論に対するを明かす

三に経論に対するを明かすとは、『華嚴』は但だ仮名俗諦・中道を詮ずるのみ。又た解して云わく、『華嚴』の教は別の三諦一心を詮ず。三蔵の漸教は真俗二諦を詮ず。方等大乘の教は三諦を詮ずること、一往は『華嚴』に同じ。『摩訶般若』も亦た具さに三諦を詮ずること、一往は『華嚴』に同じ。『法華』は但だ一心三諦を詮ずるのみ。『涅槃』は備さに三諦を詮ずること、一往は亦た『華嚴』に同じきなり。

諸論の経に随うこと、之れに類して知る可し。『中論』の偈に云わく、「因縁もて生ずる所の法は、我れ即ち是れ空なりと説く」と。此れは即ち真諦を詮ず。「亦た名づけて仮名と為す」と。即ち俗諦を詮ずるなり。「亦た中道の義と名づく」と。即ち中道第一義諦を詮ずるなり。此の偈は即ち是れ摩訶衍、三諦の理を詮ずるを申ぶ。下の両品の若きは、声聞経もて、第一義に入るを明かす。此れは即ち是れ別して、三蔵教、二諦の理を詮ずるを申ぶるなり。

### 3.23 二諦の理に約して所詮を明かす

第三に二諦に約して所詮を明かすとは、亦た三意と為す。一に正しく所詮の理を明かし、二に能詮の教を明かし、三に経論に約す。

#### 3.231 正しく所詮の理を明かす

一に所詮の理を明かすとは、即ち是れ二諦の理なり。二諦に二種有り。一には理外の二諦、二には理内の二諦なり。若し真諦は仏性に非ずば、即ち是れ理外の二諦なり。真諦は即ち仏性にして、即ち是れ理内の二諦なり。

一に理外の二諦に二種有り。一には不即の二諦・生滅の二諦なり。二には相即の二諦・無生の二諦なり。故に『大品経』に云わく、「色に即して是れ

空なり。色滅して空なるに非ず」<sup>69</sup>と。色滅して方に空なるは、是れ不即の二諦なり。色に即して是れ空なるは、相即の二諦なり。

二に理内の二諦に亦た二種有るを明かす。一に不即の二諦、二に相即の二諦なり。不即の二諦は、即ち是れ無量の二諦なり。故に『大涅槃經』に云わく、「世諦を分別するに、無量の相有り。第一義諦に無量の相有り。諸の声聞・縁覚の知る所に非ざるなり」<sup>70</sup>と。二に相即の二諦は、無作の二諦なり。

### 3.232 能詮の教を明かす

二に能詮の四教を明かすとは、三蔵教の若きは理外の不即の二諦を詮じ、<sup>539b</sup>通教の若きは、理外の相即の二諦を詮じ、別教は理内の不即の二諦を詮じ、円教は理内の相即の二諦を詮するなり。

### 3.233 經論に対す

三に經論に対すとは、『華嚴經』は理内の二種の二諦を詮じ、三蔵教は理外の不即の二諦を詮じ、方等大乘は理内・理外の四種の二諦を詮じ、『摩訶般若』は理外の相即の二諦・理内の二種の二諦を詮じ、『法華經』は但だ理内の相即の二諦を詮じ、『涅槃經』は通じて理内・理外の四種の二諦を詮ず。諸論の經を通ずること、之れに類して解す可し。『中論』の偈に云わく、「因縁もて生ずる所の法は、我れ即ち是れ空なりと説く」と。此れは理外の相即の二諦を申ぶ。「亦た名づけて仮名と為す。亦た中道の義と名づく」と。此れは理内の不相即・相即の二諦を申ぶ。後の両品は声聞の第一義に入るを明かす。即ち是れ三蔵教の理外の不相即の二諦を詮するを申ぶるなり。

69 『大品經』に云わく、「色に即して是れ空なり。色滅して空なるに非ず」『大品般若經』には見られない。類似の文は、『維摩經』巻中、入不二法門品、「色、色空為二。色即是空、非色滅空、色性自空」(T14, no. 475, p. 551, a19-20)を参照。

70 『大涅槃經』に云わく、「世諦を分別するに、無量の相有り。第一義諦に無量の相有り。諸の声聞・縁覚の知る所に非ず」『南本涅槃經』卷第十二、聖行品、「知世諦者、是名中智。分別世諦、無量無邊不可稱計、非諸声聞・縁覚所知。是名上智。如是等義、我於彼經亦不説之」(T12, no. 375, p. 684, c3-5)を参照。

### 3.24 一諦の理に約して所詮の理を明かす

第四に一諦の理に約して所詮を明かすとは、亦た三意と為す。一には正しく所詮の理を明かし、二に能詮の教を明かし、三に経論に約す。

#### 3.241 正しく所詮の理を明かす

一に所詮の理を明かすとは、即ち是れ一諦の理なり。何等を名づけて一諦と為すや。諦は審実の名づく。審実の法は、即ち是れ不二なり。豈に是れ三諦・二諦は皆な審実と名づけんや。今、真俗は説いて諦と為すと明かすは、但だ是れ方便にして、実に諦に非ざるなり。故に『涅槃經』に云わく、「言う所の二諦は、其れ実に是れ一なり。如来は方便もて衆生を化せんが為めの故に、説いて二と為す。譬えば日月転ぜざれども、酔人は転ずと見るが如し。当に知るべし、唯だ不転の日有るのみ。酔わざるの人は同じく見る。豈に別して迴転するの日有らん。若し実に転日有らば、酔わざるの人も亦た応に並びに見るべきなり」<sup>71</sup>と。一諦は真日の如し。二諦は転日の如し。真日の審実なるを、一諦と名づく可し。転日は実ならず。何ぞ二諦有らん。方便もて二を説く。実の義は成ぜざるが故に、諦に非ざるなり。今、此の一実諦を以て、所詮の理と為すなり。

#### 3.242 能詮の四教を明かす

二に能詮の教を明かすとは、藏教・通教の若きは、正しく是れ煩惱の悪酒未だ吐かず、唯だ転日を詮じて、二諦有りと説き、一実諦を詮ずること能わざるなり。別教の若きは、一実諦を詮じ、転日を離れて不転の日有るが如し。

71 『涅槃經』に云わく、「言う所の二諦は……酔わざるの人も亦た応に並びに見るべきなり」『南本涅槃經』卷第二、哀歎品、「如彼酔人見上日月、実非迴転、生迴転想。衆生亦爾。為諸煩惱、無明所覆、生顛倒心、我計無我、常計無常、淨計不淨、酪計為苦。以為煩惱之所覆故、雖生此想、不達其義、如彼酔人於非転處而生転想。我者、即是仏義。常者是法身義。酪者是涅槃義。淨者是法義」(T12, no. 375, p. 617, a18-24)を参照。

円教は一実諦を詮じ、転日は即ち不転の日なり。

### 3.243 経論に対す

三に経論に対すとは、『華嚴』の教の若きは、真俗は即ち一実諦なりと詮じ、不即の方便を帯ぶ。三蔵教の若きは、一向に一実諦を詮ぜざるなり。<sup>535c</sup>方等教の若きは、一実諦を詮ずること『華嚴』に同じ。『摩訶般若』の教は一実を詮ずること亦た『華嚴』に同じ。故に、『無量義経』に云わく、「仏成道して以来四十余年、未だ真実を顕わさず」<sup>72</sup>と。今謂わく、何ぞ実諦を説かざること有らん。但だ或いは時に縁に赴きて二諦・三諦・不即の一諦の方便を開くのみ。覆う所の『法華』の教は一実諦を詮じ、復た不即の方便無し。但だ一切は即ち一実諦なりと論ずるなり。故に、『法華経』に説く、「二万億の日月灯明仏は皆な云わく、『諸法実相の義は、已に汝等の為めに説く。今、仏は光明を放ち、実相の義を発するを助く。諸仏の法は久しくして後、<sup>かなら</sup>要<sup>ず</sup>當に真実を説くべし。正直に方便を捨てて、但だ無上道を説く』」<sup>73</sup>と。『涅槃経』の若きは、方等の通釈と同じ。仏性に入るを異と為す。諸論の経に随うこと、之れに類して解す可し。『中論』の偈に云うが如し、「亦た中道の義と名づく」と。此れは即ち是れ一実諦の教を申ふるなり。故に、青目釈して云わく、「二辺を遮するが故に、名づけて中道と為す」<sup>74</sup>と。即ち是れ因縁の空辺・仮辺を遮す。此の二辺に非ざれば、則ち真俗二諦に非ず、一実諦と名づくるなり。

72 『無量義経』に云わく、「仏成道して以来四十余年、未だ真実を顕わさず」『無量義経』説法品、「性欲不同、種種説法。種種説法、以方便力、四十余年未曾顕実」(T09, no. 276, p. 386, a29-b2)を参照。

73 『法華経』に説く、「二万億……正直に方便を捨てて、但だ無上道を説く」『法華経』序品、「諸法実相義 已為汝等説 我今於中夜 当入於涅槃」(T09, no. 262, p. 5, a10-12), 同, 序品, 「今仏放光明 助發実相義」(同前, p. 5, b19), 同, 方便品, 「世尊法久後 要当説真実」(同前, p. 6, a23), 同, 方便品, 「正直捨方便 但無上道」(同前, p. 10, a19)を参照。

74 青目釈して云わく、「二辺を遮するが故に、名づけて中道と為す」『中論』卷第四、観四諦品, 「離有無二辺, 故名為中道」(T30, no. 1564, p. 33, b18)を参照。

故に、『大涅槃經』に云わく、「一実諦とは、則ち二無きなり」<sup>75</sup>と。又た、云わく、「無二の性は、即ち是れ実性なり」<sup>76</sup>と。無二の性は、即ち是れ入不二法門なり。又た、一実諦とは、即ち是れ不生不生なり。不生不生は不可説なるが故に、浄名居士は默然として口を杜ぐ。文殊の称歎の意は此に在るなり<sup>77</sup>。

---

75 『大涅槃經』に云わく、「一実諦とは、則ち二無きなり」『南本涅槃經』卷第十二、聖行品、「実諦者、一道清浄、無有二也」(T12, no. 375, p. 685, b1-2)を参照。

76 云わく、「無二の性は即ち是れ実性なり」『南本涅槃經』卷第十二、如来性品、「智者了達其性無二。無二之性、即是実性」(同前, p. 651, c3-4)を参照。

77 浄名居士は默然として口を杜ぐ。文殊の称歎の意は此に在るなり『維摩經』卷中、入不二法門品、「於是文殊師利問維摩詰、我等各自説已、仁者当説何等是菩薩入不二法門。時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰、善哉、善哉。乃至無有文字語言、是真入不二法門」(T14, no. 475, p. 551, c20-24)を参照。